

「チーム担任制」Q&A (詳細版)

令和 6年 4月

東部教育事務所

はじめに

教員としての「個人としての指導力」の個人差・限界を補い、「集団・組織としての指導力」の向上を促す「チーム担任制」を紹介します。

学校が抱える課題は、「人材不足」「病休者の増加」「産育休補の不足」「勤務時間の超過」「不登校児童生徒の増加」「保護者対応」等、多様化・複雑化となっています。

学校課題の解決のために。学校課題や職員集団の実情に合わせて柔軟に、部分的に。他校の取組の良さをさまざま取り入れた独自性を出して……。選択肢の一つにはなりそうです。

東部教育事務所は、「固定担任制」であれ、「チーム担任制」であれ、自分とみんなのウェルビーイングの重なり合いを目指すこと、一人一人のエージェンシーの発揮を目指すことにつながるように、各学校の伴走者として、支援していきます。

東部教育事務所



導入に向けて

Q1 導入すると、どのようなメリットがありますか。



A1 学校課題の解決を目指すことができます。

例えば、児童生徒には、学校生活のさまざまな課題や学校行事に対して、自分事に捉えて考えることができるようになるなどの主体性や自立など非認知能力を育むことを目指します。また、視点が異なる複数の教師による見守りで、児童生徒は安心感をもつことができます。

教師には、負担を軽減しながらも、授業の質の向上や児童生徒の多面的な理解を深めることができます。また、初任者や臨時教員、産育病休の際にも対応しやすくなります。学級崩壊の未然防止も期待できます。

◎他校の取組における、具体的な課題や変容、学校の目標・ねらいは以下の通りです。

◆先進取組校

生徒の課題・基礎学力の不足、自分の考えをもつことや判断することに苦手意識があること。

生徒の変容・長所や個性を生かすことができるようになりました。

- ・多くの先生と関わることで人間関係を築く経験を積み重ねることができました。
- ・主体性が身につき始め、学習意欲や学力向上につながりました。

教師の課題・多忙のため、若手教職員は生徒と向き合う時間が十分に確保できていないこと。

教師の変容・指導の差がなくなり、均等化が図られ、同じ指導を保障できるようになりました。

- ・いじめや不登校が深刻化する前に、チームでの対応ができました。
- ・産育病休等による臨時教員が加わっても、引継ぎや対応がスムーズにできました。

学校の目標・複数の教職員による担任制は、「多くの異なる視点で変化を見取ること」や「子供が話しやすい教師に相談できること」で、いち早く問題に気づき、一人一人に応じた支援をチームで行うことをねらいとしています。

- ・21世紀を創り、22世紀まで生きていく生徒たちに、社会の変化に対応できる逞しさやしなやかさを身に付けてほしいと考えます。また、よさを発揮して、自分たちの力で自分たちの生活をよりよいものにしてほしいと考えます。

Q2 いつから、どのように準備するとよいでしょうか。



A2 1年をかけて準備をした学校、入学を機に毎年1年生に導入して3か年計画とした学校、前年度3学期に1週間交代制の試行期間を設定した学校など、さまざまあります。

校内では、チーム担任制の目的・内容を、学校運営上の核となる教職員へ説明・理解を促し、学年主任から所属職員へ趣旨を伝達しました。

導入までの準備や説明会を行ったり、段階的に3か年計画で進めたりできます。学校運営上の核となる教職員から共感・協働の意思を得たり、地域・保護者の理解を得るための丁寧な説明をしたりすることが大切です。

試行期間後には、児童生徒、保護者、教職員からアンケートを取り、改善策を検討しながら進めます。

◎他校の取組における、具体的な準備の様子、手順等は以下の通りです。

◆先進取組校

- ・次年度当初からの取組を見据えて、以下の手順で取り組みました。
 - ①3学期に試行期間を設けるために、2学期の運営委員会において運営委員を中心に、内容を説明し、学年教職員へチーム担任制の取組を伝達。
 - ②3学期始業式において、学校長より全校生徒へ説明。学校だよりで保護者へ説明。
 - ③CSの席において、学校長より学校運営協議会委員に説明。
 - ④入学式後に、新入生・保護者へ説明。
- ・研究指定として継続的な取組にしました。教職員の共感を得るとともに、PTAに段階的に説明をしました。
- ・入学した1年生から順次導入し、3か年計画で全校実施にしました。
- ・次年度からの導入に向けて、教委主導で、1学期に校長会等で各校の課題を解決・整理しました。2学期にはPTAへ説明をし、12月からは、教頭・教務、教職員研修などにより各校の方針の具体化等の準備と1年間かけて進めました。
- ・校長会、PTA、教頭・教務、教職員の順で、疑問や各校の課題を解決しながら丁寧に説明を進めました。
- ・学校統合後3年目が経ちます。教職員が協力的であり、旧学校のしがらみにとらわれることなく、新しいものを生み出していく雰囲気が生まれていました。導入後の7月には、チーム担任制のよさに気づき、前向きに取り組む教職員が増えたように思います。

Q3 チーム担任制を行う上での「大きなポイント」は何ですか。



A3 柔軟な発想での体制づくりや学年主任のマネジメント力がポイントです。日々の情報交換等、教職員の協働性、コミュニケーション力も必要です。

例えば、「他校の取組を参考にして全校一斉に取り組む」「一部の学年に取り入れる」「初任者や産育休の予定者がいる学年で取り入れる」など、独自の取組・体制などを、学校課題や学校事情に応じて柔軟に考えることが大切です。

さらに、児童生徒に関する情報を共有するためには、学年主任のリーダーシップと教職員の協働が大切です。

◎他校の取組における、ポイントの捉え方は、以下の通りです。

◆先進取組校

- ・生徒指導学年担当の負担の軽減が課題です。その他の業務は、均等に分業するようにしました。
- ・チーム担任制だからこそその学年所属のバランス・教職員配置を検討する管理職のビジョンが重要です。
- ・教職員同士の連携で、教職員のモチベーションを引き出すことを目指しました。子供や保護者の多様なニーズに応えることができるように努力しました。
- ・これまでの閉じた学級・個業意識・相互不干渉の風土からの脱却を目指しました。学級をオープンにし、学級間差を軽減するようにしました。



Q4 中学校が多いようですが、小規模校や小学校で取り組むことはできますか。



A4 小規模校では、全校チーム担任として、小学校では、教科担任制を行っているような中・高学年ならば可能です。低学年で試行した小学校もあります。

低学年では、なかなか難しい点もありますが、担任交代を短期間だけ試行するなど、できる範囲で取り組んでいる学校もあります。中学年では、一部教科担任制などの取組をしている学校が、導入しています。高学年は、教科担任制を生かすと導入可能です。できないと決めつけずに、柔軟な発想で取り入れることは可能と考えます。

◎他校の取組における、学校種・規模による工夫例は以下の通りです。

◆先進取組校

- ・ チーム担任制導入校でも、年度初めは1か月ほど担任を固定する学校もあります。
- ・ 全校165名、単学級の小学校でも、全学年で取り組んでいる学校もあります。
- ・ 高学年でチーム担任制を導入しています。中学年にも教科担任制を導入したところ、専門的な指導により、学力向上につながりました。
- ・ 市内全小・中・義務教育学校域で取り組んでおり、校長の指導のもと、実態に応じて柔軟に実施しています。



Q5 働き方改革につながりますか。



A5 チーム担任制だからこそ、校内人事を進めることができます。

集団・組織としての指導になるため、業務量の差、経験の差を補い合うことができます。経験が少ない初任者や臨時教職員、育児短時間勤務等の多様な勤務体系の教職員もチーム担任制なら可能性が広がります。

育児や急な家庭事情でも、チームで対応するために年休取得もしやすくなるなど、多様な働き方を実現できます。

◎他校の取組における、業務改善の工夫は、以下の通りです。

◆先進取組校

- ・子供との関係性や教職員個々の得意分野を生かして、効果的な指導や支援を行います。
- ・学級で複数の生徒指導案件を抱えることもあります。その際は、学年教職員が分担することで、きめ細やかな指導や支援ができます。
- ・勤務時間を柔軟に変更している自治体があります。

◇県内の実践校

- ・部活動の二人顧問制、終了時刻を決めていることを含めても、退勤時刻が早くなりました。
- ・水曜の部活なし日、午前授業等を含めて、年休の取得率も高いです。

(「チーム担任制」以外の視点での業務改善例は、下記を参照ください。)

県内先進取組校(中学校)におけるその他の業務改善策

(1) 教育課程

- ・月に1度の午前授業設定 → 水曜日を部活なし日とする。水曜5校時を学級活動とし、時数調整可能にした。
- ・中間テスト廃止 → 単元テスト、レポートによる評価を行う。
- ・通知表 → 三者面談・教育相談等を活用し、所見の回数を減らした。学期末の配付のみで、学期始め回収なし。

(2) 部活動指導

- ・水曜日部活動なし日。休日の外部委託(バレーボール部)。
- ・年間を通じた下校時刻(16:45)を設定した。
生徒・保護者との相談の上、季節に応じた延長や大会前の活動時間の延長は可能である。
夏季でも最大延長は~18:15(18:30完全下校)とする。
- ・顧問二人制 → 主顧問・副顧問なし。二人とも正顧問。指導に交代で顔を出すなど時間を生み出す工夫ができる。

(3) 業務改善

- ・電話対応時間の設定 → 朝7:45~完全下校30分後までとする。
- ・欠席・遅刻連絡 → 保護者が二次元コードから入力する。職員室のモニターで確認する。
- ・三者面談予定表 → 保護者が二次元コードから希望日時を入力する。
- ・デジタル生活ノート導入 → スタンプ機能・コピーアンドペーストを活用することで、担任時のコメント入力時間の短縮につながった。

(4) PTA改革

- ・PTA組織の解散 → 必要に応じて、保護者へボランティア依頼をする形としている。
- ・「教育振興会」の設置 → CS運営協議会委員を活用し、3年保護者委員を会長として、運営費管理を依頼した。
保護者活動費の項目を設定し、保護者の自主的な活動援助は行う。

具体的なシステム

Q6 どのような仕組みですか。



A6 1学級1担任制ではなく、複数の教職員で複数学級を担当します。1週間や1か月など一定期間ののち、担任が交代します。

例えば、児童生徒が所属する3学級を4人の教職員で担当します。

学校種・規模により、導入する学年や交代頻度等さまざまなシステムの構築ができます。「こうあらねばならない」というものではなく、児童生徒・保護者・教職員の声を取り入れながら改善していくなど、実態に応じた柔軟な対応で、学校独自のシステムに変更していくことが可能です。

◎他校の取組における、担任交代の仕組みは、以下の通りです。

◆先存取組校

・学年主任は担任に含めず、学年所属を5名の職員として、以下のような対応をしました。

この体制の場合、もし、1名が病休等となった際、臨時教員が補充されれば、それまで同様4名で対応したいと考えています。ただし、人員不足による補充が間に合わない場合は、3名で3学級を交代制とする予定です。学年主任はローテーションには加わず、中途での固定担任制にすることもしません。

	1組	2組	3組	副担任
1週目				
2週目				
3週目				

(例) 1週目 1組：A教諭、2組：B教諭、3組：C教諭、副担任、D教諭
2週目 1組：D教諭、2組：A教諭、3組：B教諭、副担任、C教諭
3週目 1組：C教諭、2組：D教諭、3組：A教諭、副担任、B教諭

・単学級の例

①小学校：学年ブロック（2学年合同）で担当しています。教科によっては、分担したり、合同授業を行ったりしています。

②中学校：全校で全生徒の担任としました。

・中学校で複数学級（学年7学級）の例

職員6名程度の2グループを作り、それぞれ3～4学級を担当し、1週間交代としています。

全職員で、全7学級を1週間交代で回すと2か月に1度程度となってしまいます。そのため、生徒の異変に気付きにくいデメリットがあり、2グループで実践中です。

○その他の例

・固定担任制から無理のない移行のために、窓口担当を決め、週の半分は、学級に関われるようにしました。連絡・相談窓口となり、学級事務、成績業務等を担当します。ただし、教育相談は、生徒・保護者が希望する教職員を指名してもよいこととしました。

・学校生活に慣れるまでに時間が必要と考え、中学1年は、固定担任の期間を入学後から長期設定しました。

・毎日担任が交代し、朝の会・給食・清掃・帰りの会を担当する学校もあります。

Q7 担任としての業務は、どのようなものですか。



A7 固定担任制とはそれほど変わらず、主に、朝の会、給食、清掃指導、帰りの会です。

保護者からの欠席連絡は ICT を活用し、フォーム等のオンラインで処理し、職員室のモニタに一覧表示させて全職員で確認する学校があります。欠席連絡がなく、教室に児童生徒がいない場合は、電話にて確認します。

担当する週は、道徳、学級活動、総合的な学習の時間の授業を担当します。提出物、連絡ノートの対応も行います。通常の学級担任と同様です。

◎他校の取組における、担任業務の例は以下の通りです。

◆先進取組校

- ・宿題や連絡ノートのチェックをします。保護者から連絡があった際には、その週の担任が返します。
- ・提出物等のチェックについては、週をまたがる場合には留意が必要です。
- ・道徳は、ローテーション道徳を計画し、1人1教材を数週にわたり全クラスで行います。
- ・学級活動は、学年課題を議題にしており、担当した週の学級で指導しています。
- ・総合的な学習の時間は、担当した週の学級で指導します。
- ・週あたりの授業数が少ない教科担当の教師は、同じ学級で授業に入る機会が少ないので、チーム内での役割に留意しています。



Q8 担任が交代する際には、どのように引継ぎをするのでしょうか。



A8 日頃から、担任した学級・児童生徒について職員室で情報交換をしたり、グループチャットで情報共有をしたりしています。特に引継ぎの場を設定することはしていません。

学年職員のほか、管理職や教務、養護教諭、事務職員等もグループチャットに登録します。情報として残るため、見返すこともできます。軌道に乗るまでは、学年会を開催していた学校もあります。

◎他校の取組における、情報交換・引継ぎの具体的な取組は以下の通りです。

◆先進取組校

- ・朝の打合せを、全校ではなく、学年打ち合わせに変えました。
- ・朝の打合せは、全体では月・木、学年では火・水・金と学年打ち合わせを増やしました。
- ・気になる児童生徒の姿があれば、すぐに学年会で対応を検討するようにしています。
- ・児童生徒の状況にあわせて、交代のサイクルを柔軟にする場合もありました。
- ・職員室では、いつも児童生徒の話題があがっており、情報共有が常にできています。
- ・日常的な情報交換が多く、学年会の回数は、増えませんでした。
- ・ICTを活用し、アレルギー対応の児童生徒を確認することで給食時の事故を防いでいます。
- ・ICTを活用し、チャットを学年職員の他、学校長、教頭、教務、養護教諭、事務を含んで情報共有するようにしました。生徒情報、保護者とのやり取り、電話連絡の内容、学活や総合で使用予定の作成教材の確認等、さまざまな情報をチャットに書き込むようにしています。



Q9 通知表等は、どのように対応するとよいですか。



A9 学校に応じてさまざまな対応が可能です。

例えば、1名の職員が担当する生徒は、全学級にいるようにしています。所見を担当する生徒数は、固定担任制よりも少なく、業務の軽減ができます。担任名には、学年所属の教職員全員を表記している学校もあります。

振り分け方は学年によりますが、下記(表1)のように全学級に担当する生徒がいます。例えば、固定担任制では32名担当するところを、24名に軽減できます。通知表・出席簿・指導要録等各種書類の担任名には、学年所属の教職員全員を表記するように設定している学校もあります。

(表1)

(分担例)	1組(在籍32名)		2組(在籍32名)		3組(在籍32名)		所見担当
A教諭	出席番号1~8	8名	出席番号1~8	8名	出席番号1~8	8名	24名
B教諭	9~16	8名	9~16	8名	9~16	8名	24名
C教諭	17~24	8名	17~24	8名	17~24	8名	24名
D教諭	25~32	8名	25~32	8名	25~32	8名	24名

◎他校の取組における、成績・所見等事務処理の取組・分担例は以下の通りです。

◆先進取組校

- ・教科等の評価については、教科等を担当する教職員がそれぞれ行います。ただし、交換授業や学年全体で行う学習などで、教職員が複数にわたる教科(総合的な学習の時間、道徳等)については、学級担任が取りまとめて行うようにしました。
- ・所見については、他の教職員の評価・記録を取りまとめて、まず、学級担任が所見素案を作成します。次に、その所見素案を学年の教職員で検討して案にし、校長に提出します。
- ・日常の窓口対応は、全員で行いますが、教育相談等は、児童生徒・保護者から指名された教職員が行うようにしました。
- ・学級通信は、学年通信に統合して発行するようになりました。月2回、行事予定や学校の様子を発信しています。(小)。
- ・1・2年生は、番号による振り分けをしました。3年生は、進路の関係もあり、番号による振り分けではありません(中)。
- ・生徒にも、担任が誰なのかを伝えていきます。教育相談・三者面談は担任が行います。
- ・保護者からの日常の問い合わせ等は、学年職員誰でもよいと発信しており、保護者が教職員を選ぶこともできるようにしました。

導入してみて・・・

Q10 児童生徒には、どのような変容がありましたか。



A10 生徒の主体性が伸びてきているようです。クラスづくりを自分たちでやっいていこうとするようになりました。

担任の指示待ちでなく、自ら率先して動くことができるようになっていました。話しやすい教師に相談したり、多くの教師とのかかわりを楽しんだりしています。

◎他校の取組における、児童生徒のアンケート結果や変容は以下の通りです。

◆先進取組校

- ・学級活動等、本音で話し合う場ができています。
- ・多くの教師とのかかわりを喜ぶ声もあります。

◇県内の実践校

- ・校内研修（学級活動）を生かし、学級委員を中心とした集団作りを目指した指導を繰り返したところ、外部講師を招いた学校行事では、進行役、質問役など生徒たち自身で分担を決めることができました。
- ・アンケートでは、肯定的な意見ばかりではありません。教職員も改善の努力をしています。

◎「雰囲気毎週変わるの面白い」

「過ごしやすくなった」

「自分たちで率先して何かをするようになり、学びが多い」

▲「先生によって、やり方が違うので、わからなくなってしまう」

「ルールを統一してほしい」

→ 生徒指導担当が明文化し、教室に掲示することでルールの周知を行いました。

「情報がちゃんと伝わっていない時がある」

→ 情報共有の重要性を再確認しました。



Q11 保護者からの声は、どのようなものがありますか。



A11 新しい取組のため、まだ不安はあるようですが、苦情等はほとんどありません。要望等がありますが、肯定的な意見も多数あります。

保護者は、新システムの導入にあたり、不安が大きいようです。取組内容を丁寧に説明し、理解を求めていくことが大切です。

◎他校の取組における、保護者からの声は以下の通りです。

◆先進取組校

- ・「複数の目により、評価に偏りがなくなる」「相談できる先生を選べる」など肯定的な意見もありました。
- ・新3年生へのチーム担任制導入は進路指導に関わるため、学年の全教職員が一人の生徒に関する情報をどれだけ持ち合わせているのか不安だという声が複数校あります。
 - 窓口担当を明確にしたり、情報共有をこまめに行ったり、保護者へ理解を促したりといった対応がされています。

◇県内の実践校

- ・アンケートでは80%超が肯定意見でした。
 - ◎「生徒たちそれぞれによるクラスカラーが生まれ、自主性にもつながり、とてもよい」
 - 「どの先生も子供の状況を把握している」
 - 「今のところ問題はないと思う」
 - ▲「誰に相談したらよいか戸惑うことがある」
 - 相談相手は誰でもよいことを、繰り返し発信していきます。
 - 「共有がしっかりされていれば安心ですがそこまで至らず、不安や戸惑いがある」
 - 情報共有をしっかりし、生徒・保護者に信頼してもらえるように改善する。

Q12 教職員の「手ごたえ」はありますか。



A12 学級づくりについて学ぶことができ、多くの児童生徒とのかかわりをもつことができるようになりました。また、指導法等について相談しやすいです。生徒指導の対応が早くできる点もメリットです。

担任業務の朝の会、給食指導等のルールを統一させること、担任が定期的に交代することにより、問題を一人で抱え込むことがなくなり、初任者・臨時教員等の経験年数の少ない教師でも指導力向上につながります。

複数で対応したり、生徒とのつながりや関わり方を重視したり、より専門性の高い職員が対応したりするなど、児童生徒に寄り添う積極的な生徒指導・教育相談体制が可能になります。

◎他校の取組における、教職員からの声は以下の通りです。

◆先進取組校

- ・学級が開かれていて、学年のどの教職員が入っても、生徒も教職員も違和感がないようです。
- ・人間関係のトラブルに対し、早期発見や情報共有ができ、学年教職員で分担ができました。
- ・チーム担任をしている教職員のアンケート結果は肯定的な意見ばかりでした。誰もやったことがない取組で、やってみることで、よさが分かったという声もありました。

◇県内の実践校

- ・生徒指導対応がとにかく早くできることがよいです。
- ・1学期の終わりには、手ごたえを感じる教職員が多く、非常に前向きに取り組んでいます。
- ・◎「他のクラスのやり方を聞きやすい」
「副担任の週があり、精神的肉体的に楽」
▲「生徒からの不満を受け、情報共有をしっかりとっていくべき」「1週間では短い」
「生徒指導担当の負担が大きくなった点は、今後改善が必要」
→ さまざまな改善策を検討しています。

検索サイト等で調べてみると、「チーム担任制」
「学年担任制」「複数担任制」等の名称で取り組ん
でいる学校は、全国にたくさんあります。

東部教育事務所は、学校をとことん支援します！
お気軽にお問い合わせください。

